



多様性と少数意見

浅野 純次

(経済倶楽部理事)

▼民主主義の原則の一つに多数決があります。どうしても方向性を決め、あるいは結論を出さねばならぬときに多数決でいくしかないことはしばしばあります。

しかし「政策を多数で決める」のはともかく、議論まで少数意見が無視されるといふのは極めて危険です。

▼消費増税の今後の展開はその意味でどうなるのか。争点は「今」かどうかでしょうが、ベストのタイミングとも思えません。「今、増税の決断ができないと日本に対する世界の信認は地に落ちて、国債暴落が必至だ」という増税派の説も、我田引水の気配が感じられ

ないでもない。：真理は中間にあり、ということも少なくないわけで、別の表現をすれば二者択一しかない論争の畛にはまらぬ注意も重要です。

▼全面肯定か全面否定か、世の中、そんな対立概念のみで成り立っているわけではないでしょう。反原発か原発推進かもそうです。多数意見は反原発、ベクレルはゼロでなければ絶対にノーのようですが、少数意見にも耳を傾けてみたほうが、ストレスも減るし健康にもいいのではないかと。

▼先頃、甲狀腺被曝で87ミリシーベルトの人、セシウム検出で7200ベクレルの人が見つかったというニュースがありました。これを聞いてメディアは重大な警告と受け止めて大きく報道していましたが、少数派の高田純・札幌医大教授はチエルノブイリの1000分の1以下の被曝量なので心配はないと言っています(そういう意見は新聞には出ません)。

▼先日、友人たちと欲談したときに「福島核汚染の

実態はチエルノブイリよりもはるかに大きいんだよね」という意見が出てびっくりしてしまいました。新聞からそういう印象を受けてしまうのかと思いましたが、結局、新聞には少数意見が載りにくいのだと改めて感じた次第です。

▼ところで経済倶楽部の常連講師である田中弘・神奈川大学教授による『IFRSはこうなる』という本が東洋経済から出版されました。IFRSは英米が主導して世界中の企業に適用させようとしていた国際会計基準ですが、当初は日本でも「これを取り入れないと世界標準から取り残される」というので企業会計審議会が「強制適用」を決めるなど既成事実が進んでいました(会計基準に傍点を振ったのは、IFRSは会計基準などではなく単なる企業身売りの計算方法だといふ著者の指摘によります)。

▼田中さんは時価会計批判をはじめIFRSにも批判の論陣を張ってこられました。当初は少数意見でし

た。しかし1年ほど前からようやく産業界にも同調の空気が生まれ、自見庄三郎金融・郵政改革担当相が批判的決断を下したことで流れが大きく変わり始めました(これでたくさん出版されてきたIFRSの解説書はさっぱり売れなくなっただけでは?)。ともあれ少数意見が多数意見に変わる瞬間を見ることができたわけで、田中さんと祝杯を上げたい気分です。

▼一時は賛成色だったTPPも、少数意見が多数意見に逆転しつつあるように見えます。公共事業はムダという多数説も、「必要な公共事業はいくらでもある」という少数説と真つ向勝負になる日が近いかもしれません。感覚的に世論が形成される背後に、利害から誘導する学説や政策が存在して多数説は作り出されます。老朽化が進むインフラを、大地震に備えてどうするか、公共事業罪悪説だけで来たツケを早急に点検する必要があります。石橋湛山さんも戦前戦後、少数意見で孤軍奮闘しました、と言っては牽強附会、でしょうか。